

Title	再び真福寺泥炭層出土の土器について(上)
Sub Title	On the potteries from Shinpukuji peat-bed, Saitama Prefecture
Author	鈴木, 公雄(Suzuki, Kimio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1980
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.50, No.記念号 (1980. 11) ,p.627- 643
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	考古民族・地理 第五〇巻記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19801100-0631

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

再び真福寺泥炭層出土の土器について(上)

鈴木 公 雄

目次

- 一 緒言
- 二 拓本資料の紹介と分類(以上本号収録)
- 三 安行式の細分と泥炭層出土土器(以下次号収録)
- 四 結語

一 緒言

大山史前学研究所は東京湾に注ぐ主要溪谷における貝塚群の総合的研究の一環として、大正一五年一〇月(一九二六)に、埼玉県岩槻市真福寺(当時は岩槻町字東原及び柏崎村字真福寺)所在の真福寺貝塚の発掘調査を実施し、さらに翌月の十一月には、貝塚の東方に位置する泥炭層遺跡の発掘を行った。このうち、貝塚の調査結果については甲野勇によって報告が公にされ(甲野 一九二八)、これは戦前、戦後をつうじて関東地方晩期縄文文化の研究においては、まず掘るべき基本的資料となった。また、大正一五年十一月に行われた泥炭層の調査においても、貝塚調査時をうわまわる後・晩期縄文文化の貴重な資料が多数発掘された。そして貝塚と泥炭層のそれぞれから出土する土器のあいだに、かなり顕著な相違のあることが甲野勇、竹下次作をはじめとする史前学研究所のメンバーによって指摘された。このことは当時安行式として一括されていたこれらの土器が、単一の様相をもつものではなく、さらにいくつかの型式に細分しうる可能性を示唆

再び真福寺泥炭層出土の土器について (上)

したものであり、その後の山内清男による安行式土器の細分の端初をひらくものであった（山内 一九三四）。

このように、学史的に重要な役割を持った資料であったにもかかわらず、泥炭層出土土器は大山史前学研究所の戦災とともに焼失してしまい、その後の研究に有効に活用される道がとぎされてしまった。ただし、不幸中の幸ともいえることは、当時大山史前学研究所所属であった竹下次作氏（当時中村次作）によって、出土土器については整理用の手びかえとして拓本がとられていたのである。その内容は整理の手びかえであるため断面図を欠いているなどの点はあるものの、当時における泥炭層出土土器の全貌をほぼ知ることのできる貴重なものである。

この拓本はスクラップブック二冊に貼付されたまま、長く専門家の間に知られることなく過ぎてきたが、本塾民族学・考古学研究室が東部関東地方を中心に晩期縄文文化の研究を開始するに至って、常にわれわれの研究に支援をおしめなかつた竹下氏は、この拓本資料を提供され、真福寺泥炭層遺跡の再調査に基力されたことは、すでに先の報文中に述べた通りである（清水・鈴木 一九六六）。筆者等は、先の報文につづいて、できる限り早い機会にこの拓本資料を紹介する意図を持っていたが、様々な事情から今日に至るまでその責をはたすことができなかった。今回ここに機会をえてその全容を紹介し、この拓本資料が安行式土器の編年研究の中に占めた役割りを明確にするとともに、最近までの成果にもとづき、先の報文において筆者が提起した安行3c式土器の細分問題について再検討を試みてみたい。

二 拓本資料の紹介と分類

竹下氏が保存されていた拓本は断面図を欠いているが、先に筆者等が調査報告した泥炭層出土土器や、最近までに明らかにした周辺の遺跡の類似資料などを参考にすることにより、その器形上の特徴についてもほぼ明らかにすることができる。このような点を加味して整理してみると、第1図～第5図のようになる。これらのうち、関東土着の土器については器形を中心に四類に大別し、さらにその中を細分項目に分けた。またこれらの他に第五類として大洞系土器を一括し

た。分類の全容を示すと以下のようになる。

第一類 深鉢 (1 ~ 60)

波状縁深鉢 (1 ~ 5)

平縁深鉢 (6 ~ 60)

同 a (6 ~ 8)

同 b (9 ~ 13)

同 c (14 ~ 17)

同 d (18 ~ 23)

同 e (24 ~ 26 · 29 · 38)

同 f (27 · 28 · 30 ~ 37)

同 g (54 ~ 56 · 58 ~ 60)

第二類 広口壺

広口壺 a (39 ~ 44)

同 b (45 ~ 53)

第三類 浅鉢

波状縁浅鉢 (62 ~ 64)

平縁浅鉢 a (65 ~ 67 · 70 · 74)

同 b (69 · 71 ~ 73 · 75)

同 c (76 ~ 78)

再び真福寺泥炭層出土の土器について (上)

第四類 台付 (80~82)

第五類 大洞系土器 (83・85~96)

第一類 深鉢 (第1図1~第3図60)

深鉢形土器は波状縁を持つものと、平縁のものに大別した。平縁の深鉢にはいくつかの変化が認められ、それぞれ器形・文様上の特徴によってa~gの六つに細別する。それらは後期末から晩期初めごろの伝統を引くもの(波状縁深鉢、平縁深鉢a、b、d)と、それらからさらに変化して来たもの(平縁深鉢 e)の二者に区別して考えることができる。

波状縁深鉢 (第1図1~5)

1と3、4と5はそれぞれ同一個体と思われる。2は細密な沈線が縄文の代替をしているもので、この沈線が施されている部分と、すり消されている部分とが逆転している例である。このような例は埼玉県を中心とした地域で姥山Ⅱ式などの波状縁深鉢に時としてみとめられる。この2と同じ類例は、川崎市下原遺跡(神奈川県 一九七九)、に存在している。これら1~5の全ては、いずれも文様の構成に菱状構成や、沈線による入組文を有する点からみて、姥山Ⅲ式的な性格を持っていると考えられる。

平縁深鉢 a (第1図6~8)

口辺部がやや内傾する深鉢で、口辺部から胴部上半にかけてに沈線による杵状文を持つ。6はきわめて文様構成が整っており、7は多少くずれがみられるが、胴下半部に特有の斜方向の条線文がまだ施されている。8はきわめて文様がくずれたものといえる。8以外のものは姥山Ⅲ式と従来呼ばれていたものに相当する。

平縁深鉢 b (第1図9~13)

器形は先のbと同様だが、文様に細密な沈線が施されているものである。9・10のように、半月状の文様構成をと

り一部に縄文を有する10のようなものと、11と13のように方形の区画文や帯状の構成を持つものの二者が存在するが、ほぼ同一時期のものと考えてよいだろう。このうち前者は東部関東地方の姥山Ⅱ式土器の一部をなす。後者は埼玉県下から東京都一帯さらには神奈川県下まで存在しており、広い分布を持つことが最近判明してきた。

平縁深鉢 c (第2図14と17)

ここちもち内側にたおれこみながらも外反する口辺部を有する深鉢。胴部上半に沈線のみによる連続入組文を有する。日本先史土器図譜の99に示された土器は、入組文が三叉状となっているが、この点だけを除けば本例ときわめてよく類似したものとといえる。全く同一のものは筆者等の調査した泥炭層からも出土している(清水・鈴木 一九六六第1図1、第3図)。これらの土器は従来縄文を持たないが安行3b式に相当するものと考えられていたようである(たとえば山内 一九三九と四一)。

平縁深鉢 d (第2図18と23)

やや内傾する口辺部を持った深鉢となると思われる。器形・文様は安行系紐線文土器の流れを受けつぐもので、二本の紐線の構成をよく残しているもの(18と20・22・23)が多いが、次のeに盛行するような文様構成をすでに示している。これらの土器は埼玉県(奥東京湾周辺地域)を中心に多数の例が知られており、その型式学的変遷も十分に分析されている(金子 一九七二a 一九七五 一九七九)。晩期初頭と前半に属するものである。

平縁深鉢 e (第2図24と26・29・38)

平縁深鉢dと同じような器形・文様を持つが、dよりもさらに変化し、列点文が多用されるようになる。第2図18と24・25を比較することから、両者がきわめて文様系統のうえから関係深いものかが理解できよう。沈線や列点は先のd類よりも太くなり、安行3c式のそれと類似してくる。38は鉢ないし浅鉢となるかも知れない。

平縁深鉢 f (第2図27・28・30と37)

再び真福寺泥炭層出土の土器について (上)

器形は先の e と類似するが、文様はレンズ状ないし弧状に引かれた太い沈線とその中をうめる列点文によって特徴づけられ、とくに列点が 27・33・35・37 のように複列となるものが注目される。文様構成そのものは先の d、e 類から変化してくるものであることは 18・25 と 34・35 などと比較すればよくわかる。その意味では、本 f 類も安行系紐線文土器の流れの末端に位置づけられる。これらに類似する土器は、埼玉県、東京都、神奈川県、千葉県の一部などに広く分布しており、なかでも石神貝塚 B 地点（坂詰 一九六三）や、小豆沢貝塚（山内 一九六七）などの資料とよく一致する。一般に安行 3c 式の古い部分とか、3b 式と呼ばれているものである。本稿では後述するように従来の安行 3c 式を 3c 式と 3d 式に区分した場合には安行 3c 式そのものに相当するものと考えている。

平縁深鉢 g (第 3 図 54、56 58、60)

58 を除いて全て沈線と列点によって文様が構成されるが、文様そのものにはあまり共通性がみとめられない。54 と 55 は単独の弧線入組文を有するもので 60 などと共通した文様を持つものとみられ、器形は鉢に近いものであるかも知れない。56・58 はやや外反する口辺部となると思われるが、口唇部に二対一組の粘土貼付を有する点は晩期前半の系統を引くものとみられよう。59 は場合によっては波状縁となるかも知れない。これらの土器はさまざまな文様がみられ、本来はさらに区分して考えなければならないものを含んでいるが今はこのまま一括しておく。ただし文様上の特徴はやや問題のある 58 以外は全て従来の安行 3c 式の古い部分としてひとまとめに扱うことができる。

第二類 広口壺 (第 3 図 39、53)

頸部がきちんと集約する正規の壺形土器は関東地方の晩期縄文土器においては発達をみなかった器形で、その代りに広口壺と呼べる類似の器形が存在する。これはかつて筆者が変形広口壺と呼んだもので晩期の初頭から出現し、その伝統は晩期中葉の安行 3c 式、前浦式までつづくが、晩期中葉の特に安行 3c 式くらいからは器形の便化が著しくなり、他の器形との区分が不明瞭になる。特に頸部の集約が弱くなったものは、口辺の外反する深鉢形土器との区分がつけ

にくくなる。たとえば先の平縁深鉢の e、g などの間が不明瞭となるのである。ここでは文様上の差異から二つに区別して扱う。

広口壺 a (第3図39、44)

頸部が集約し口辺が外反する広口壺で頸部以下胴部上半までが主文様帯となり、そこに細密な沈線や平縁深鉢cでみられたような沈線による連続入組文が施される。この細密な沈線は時には矢羽ないし格子状に施されることもあるが、一般的にみて縄文の代替としての性格を持っているとみられる。小深作遺跡からは極めてよく類似した資料が出土している(大宮市教育委員会一九七一年)。所属時期については後に詳しく述べるが、姥山Ⅲ式の一部を構成するものと考えられる。

広口壺 b (第3図45、53)

器形はaと全く変わらず、主文様帯の位置も同様であるが、そこに配される文様が沈線による連続入組文と列点によって構成される点に特徴がある。なかでも注目すべき点は、45のように沈線による連続入組文が二本の平行沈線で描かれるいわゆる带状入組文となるものの存在である。この種の土器は小豆沢貝塚(山内 一九六七)や石神貝塚B地点(坂詰 一九六三)、さらに黒谷田端前遺跡(岩槻市遺跡調査会 一九七六)、東高井遺跡(埼玉県教育委員会 一九七五)など多くの類例がある。48・51のような列点も大きく、やや粗雑なものと、45・47・50のような整った構成を持つものがあるが、後者と先の広口壺aとを比較し、さらにこれに姥山Ⅱ式の広口壺を加味してみるとその文様の系譜がよく理解できよう。53は本来無文となる口辺部に沈線による入組文を有する例である。以上の土器はきわめて特徴的であり、安行3c式の古い部分に相当する、換言すれば安行3c式と3d式に分ければ3c式そのものに相当するといえる。

第三類 浅鉢(第4図62、78)

再び真福寺泥炭層出土の土器について (上)

浅鉢は波状縁を持つものと平縁のものにまず二大別し、平縁浅鉢はさらにそのなかをいくつかに区分するが、全体として器形・文様に変化が多い。拓本のみにては浅鉢形土器と台付土器との区分が不明瞭になる場合も少くない。文様からみると晩期前半の伝統を引くものと、それから変化したものとが認められる。

波状縁浅鉢（第4図62、64）

波状縁浅鉢は総じて古い様相を持っている。波頂部に粘土貼付がみられることなどはそのよい例である。62・63などは従来姥山Ⅲ式と呼ばれているものに相当する。

平縁浅鉢 a（第4図65、67・70・74）

主として二本の平行沈線と、その中をうめる列点によって文様が構成されるもの。66は口唇上に粘土貼付を有し、文様構成も整っていて姥山Ⅲ式の代表的な平縁浅鉢といえる。65・67・70なども姥山Ⅲ式の中に含めて考えられるものである。74は次の浅鉢bにみられるものときわめて近い文様構成を持つが、基本的には本類に含めて考えられる。

平縁浅鉢 b（第4図69・71、73・75）

弧状の平行沈線、入組三叉文などによって文様が描かれるが、列点はむしろ少い。69と73は同一個体かも知れない。69・75のような文様は、66・74と比較することから、浅鉢aの流れが変化した結果発達してきたものと考えられる。従来から安行3c式の浅鉢形土器として考えられてきたものである。

平縁浅鉢 c（第4図76、78）。

レンズ状の沈線と列点（76）、入組三叉文と列点（77・78）といったような沈線と列点を主調とするもので、文様のおうえからは先の浅鉢bとは異り、平縁深鉢e、広口壺bなどと共通する。安行式3cを代表する浅鉢形土器の一つである。78は台付土器の口辺部であるかも知れない。

第四類 台付土器（第4図80、82）

一般に安行3c式（広義）の台付土器には器壁や脚部が直線的で、入組三叉文が発達し、列点文は文様帯を区画する平行沈線の中だけに用いられるものと、器壁が曲線的で、特に脚部の形態がくびれたり下端部が急に外にひらいたりする形を持ち、平行沈線と列点、あるいは帯状入組文と列点という文様構成を持つものの二者がある。本資料に含まれるものは器形判別上の問題はあるが大略後者に属するものとみられる。80、82がそれで、入組三叉文、単独三叉文、平行沈線による帯状入組文と列点が組合わさる台付土器だろう。80は波状縁の台付とみられるが、ここでは類例が少いため平縁と一括しておく。

第五類 大洞系土器（第4図 83・第5図 85、96・105・106）

大洞系土器はかなりの量で存在しており特に晩期中葉の大洞C₁式に相当するものが量的には多い（88、90、92、95）。これは先に報告した筆者等の調査した泥炭層出土土器にみられる傾向と同一である。ただし注目すべき点としては、大洞B-C式に相当する良好な資料が存在する点で、とくに85・87などは注目すべきものである。このうち87は杉山寿栄男の「原始工芸」に示された土器と同一のものであると考えられる（杉山 一九三〇）。胴部をめぐる突帯と整った彫刻的羊歯状文がみられる。85は87とは異った、いわゆるかみ合わない羊歯状文を持つものだが胴部にあやくりを有するかなり大形の鉢ないし深鉢となるものとみられる。83・86・91なども大略上記の土器と同一のものと考えられよう。大洞C₁式に関しては93にみられるような文様が極めて整った浅鉢形土器で、本格的な亀ヶ岡式土器として扱えるような例と、92・94・95のようにやや形態・文様にくずれをみせているものの二者がある。このうち93は真福寺貝塚の調査報告書の図版第八の2に示されたものと同じの資料と考えられる（甲野 一九二八）。その点から考えると93は泥炭層出土品ではない可能性も考えなくてはならないが、真福寺貝塚の報告（甲野 一九二八）には貝塚出土品以外の資料も掲載されていると考えられるので（山内 一九三四）、これらの亀ヶ岡式土器は泥炭層出土品と考えた方が妥当で

再び真福寺泥炭層出土の土器について

(上)

あろう。また94は先の87と同じく、「原始工芸」に示されており、山内清男の晩期土器に関するいくつかの論考にも引用されている(山内 一九三〇、同 一九三二)。今回の拓本によると、この土器は口辺のうら側に一条の沈線がめぐり、突起のうら側にも沈線が施されている皿ないし浅鉢形土器であることがわかる。晩期後半の資料としては105および106がある。106は小形の浅鉢となるもので、上段の拓本は口辺のうら側に施された二本の沈線を示したものと考えられる。106は浮線文を有する小形の浅鉢ないし鉢形土器と考えられる。このような晩期後半の資料の存在は、すでに筆者等の調査でも明らかであったが、今回の資料によりその点がさらにはっきりとしたものになった。晩期初頭の資料としては96をあげることができ、97と103は大洞系土器とするにはあまりにも地方化による文様変形が激しく、むしろ関東地方における晩期前半の土器と考えた方がよい。104は安行3a式に伴う胴部に突帯をめぐらす浅鉢の一部である。これら97と104の土器は図版の関係上ここにおさめた。

以上第一類から第五類に区分して拓本資料の紹介と分類を行ってきたが、これらの中で第一類と第四類に示される関東土着の土器のなかに、実はさまざまなグループが存在することがわかる。このような様相は先に筆者等が行った泥炭層出土土器についても同様であり、両者は共通した性格を持つものといえる。先の報文において筆者等はこれらの土器を、

- ①のグループ 細密な沈線によって文様の描かれるもので、沈線入組文、S字状連続文などを伴うもの。
- ②のグループ 姥山Ⅲ式に相当するもの。
- ③のグループ 太い沈線と列点で文様が構成され、帯状入組文、レンズ状沈線文、平行沈線文などの文様を有し、三叉文ないし三叉入組文のあまり発達していないもの。

④のグループ 沈線と列点を主調とするが列点を一部で欠いたり、三叉状入組文が加わっているもの、の四類型に分離して考えたが、それらのグループと今回の分類結果を対応させると以下のようなになる。

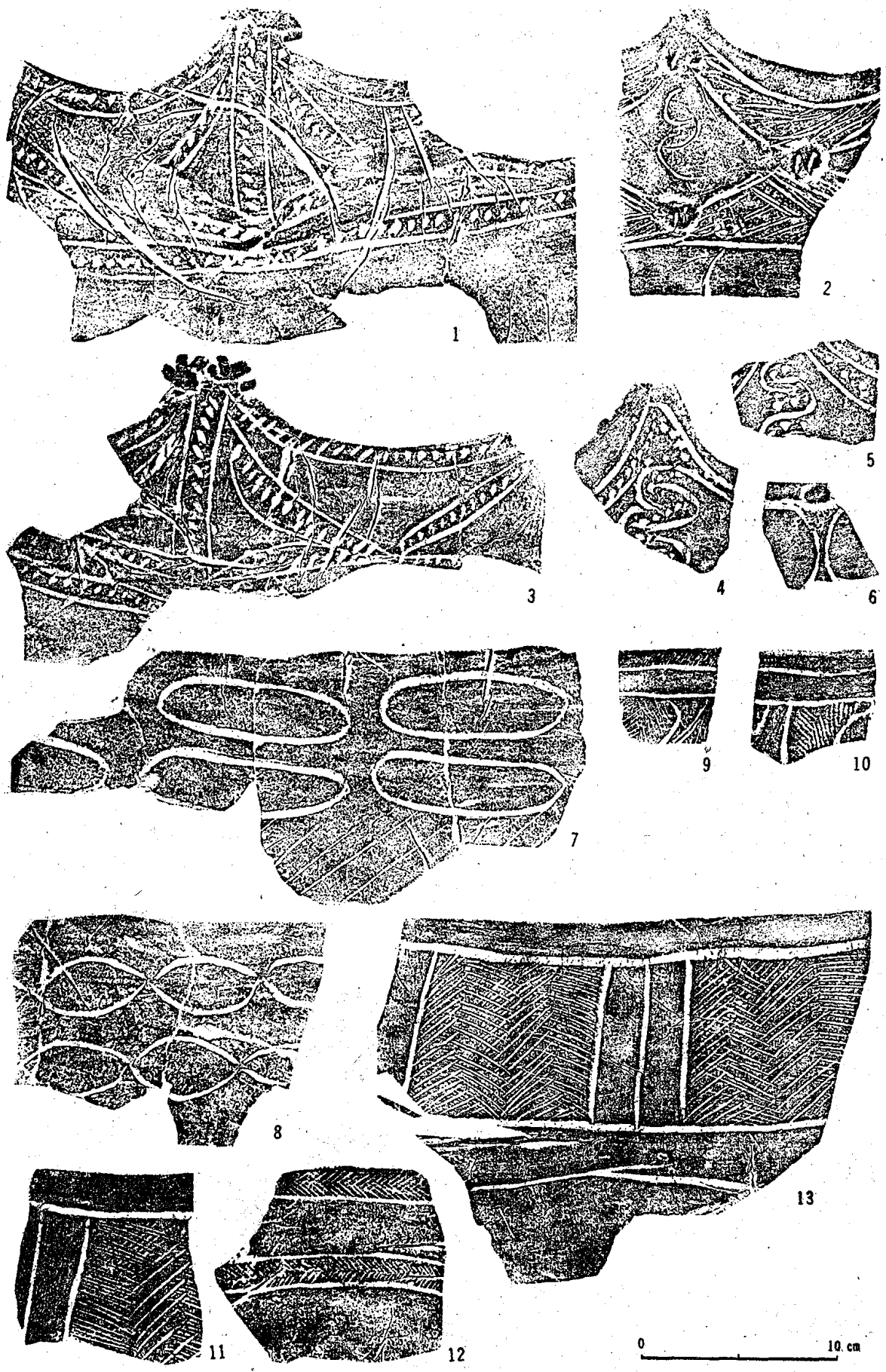
第一類

	波状縁深鉢	②のグループ
	平縁深鉢	②のグループ
同	b	①のグループ
同	c	②のグループ
同	d	該当せず。
同	e	③のグループ
同	f	③のグループ
同	g	③のグループ
第二類		
	広口壺	①のグループ
同	b	③のグループ
第三類		
	波状縁浅鉢	②のグループ
	平縁浅鉢	②のグループ
同	a	②のグループ
同	b	④のグループ
同	c	③のグループ
第四類		
台付		③のグループ

先の筆者等の報文において、われわれは①のグループと姥山Ⅲ式(②のグループ)との関係、また③のグループと杉田再び真福寺泥炭層出土の土器について (上)

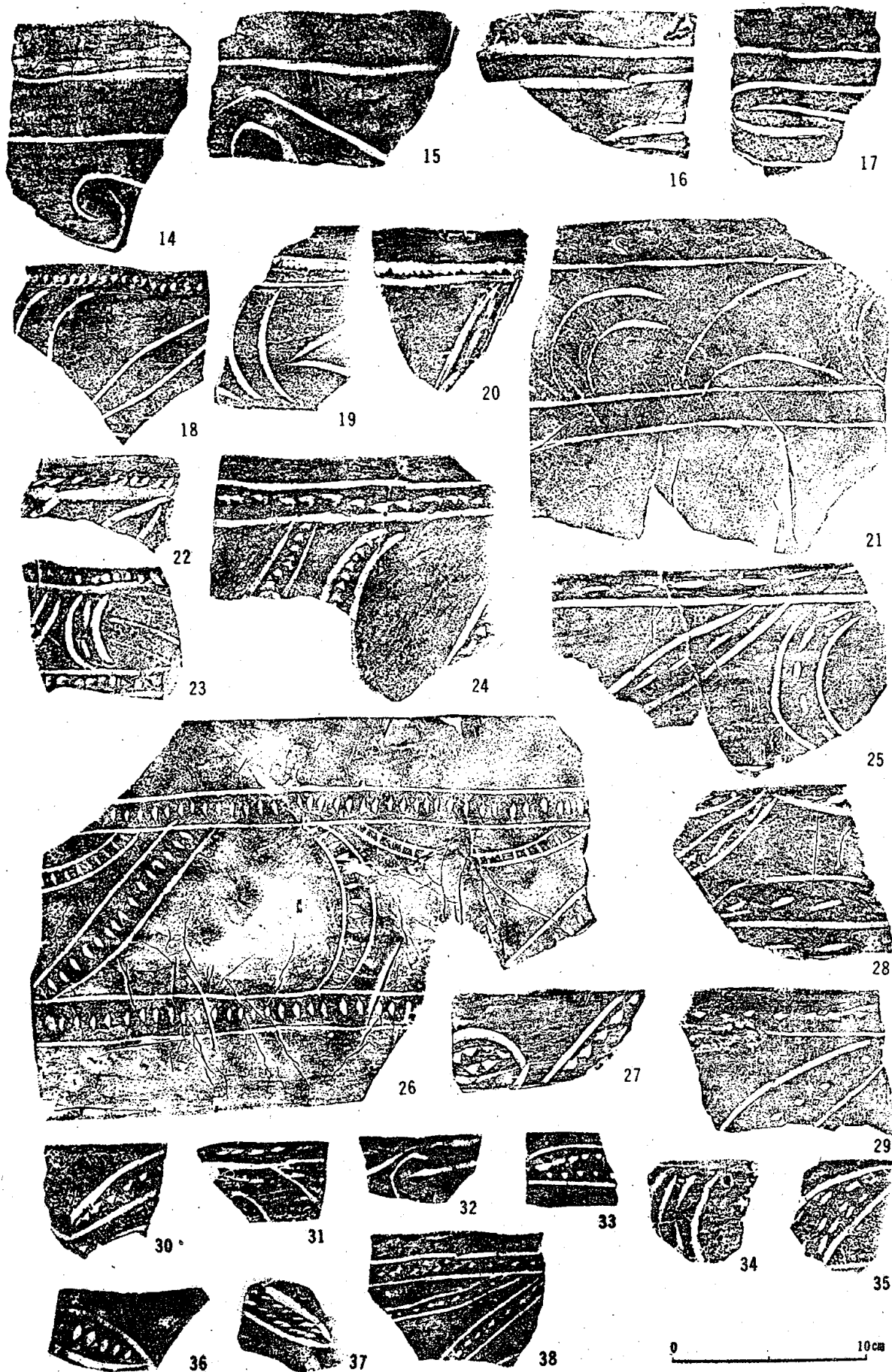
A類④のグループとの関係をそれぞれとりあげた。換言すれば、真福寺泥炭層出土土器の中で、縄文が施されない土器は、大きく姥山Ⅲ式に関連するものと、安行3c式の細分に関係し、その古い部分に相当するものとの二者が存在することを指摘した。これらの点については先の報告以降多数の同時期の遺跡が調査され、また山内清男も戦前の小豆沢貝塚の出土資料を公にするなど多くの比較資料が蓄積されている。従って、上記の点について、これらの資料とともに安行3式の細分にかかわる学史的な検討をも加えつつ、以下でとりあげてみたい。

再び真福寺泥炭層出土の土器について
(上)



六三九

第 1 図

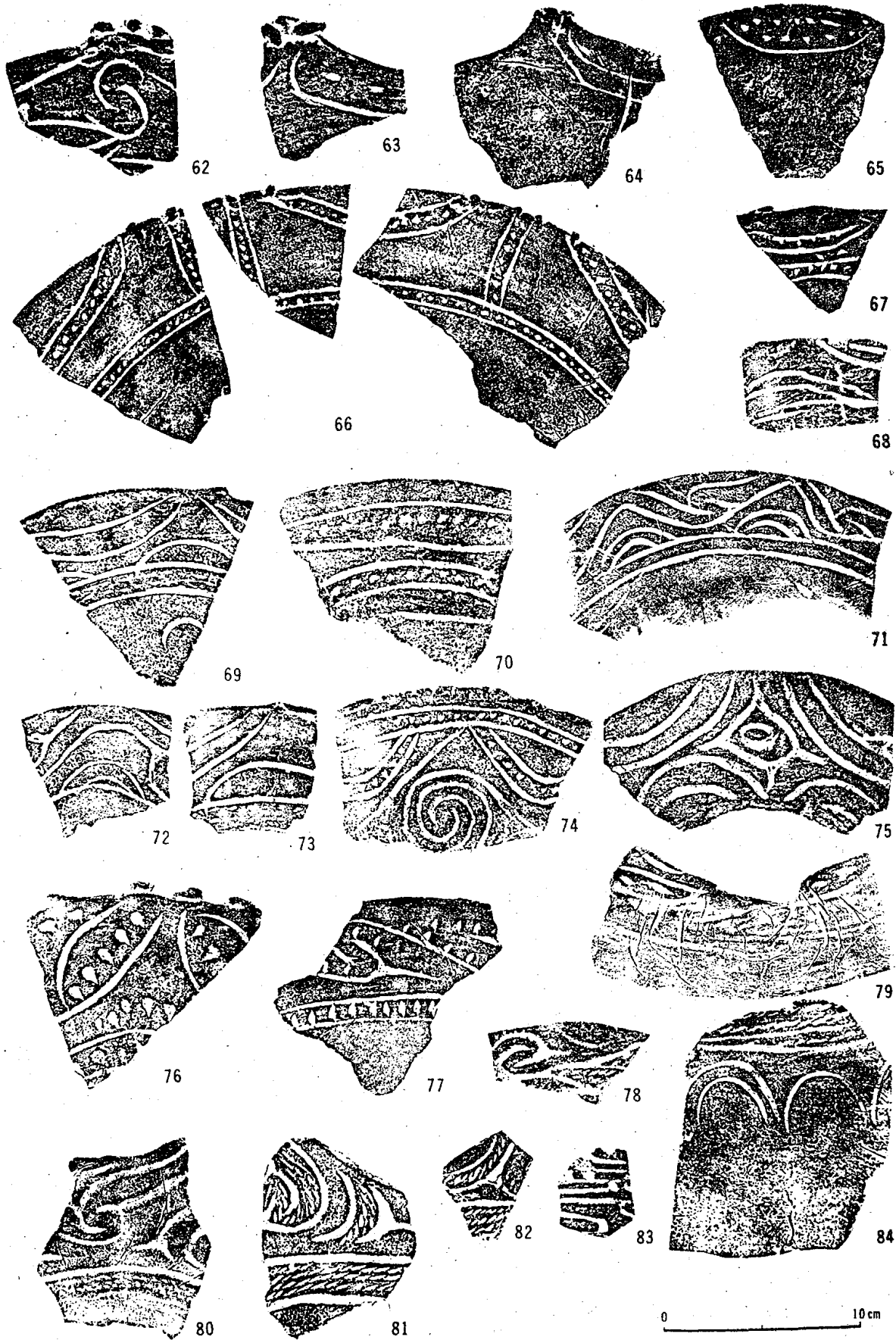


第 2 图

再び真福寺泥炭層出土の土器について
(上)



第 3 図



第 4 图

再び真福寺泥炭層出土の土器について
(上)



六四三

第 5 図